

児島惟謙歿後百年記念展の記録

藤原有和

はじめに

年史資料展示室では、関西大学の前身である関西法律学校創立者群像のなかで中心的役割をはたした児島惟謙（一八三七—一九〇八。「児島」姓は「児島」に統一した。以下同じ）の歿後百年を記念して、平成二十年度企画展「正義を権力より護れ—児島惟謙歿後百年記念展—」を開催した。

開催期間は、平成二十年四月一日から平成二十一年三月末日まで。土曜、日曜、祝日および大学が定めた休日は閉館。但し、校友会スプリングフェスティバル、教育後援会総会、オープンキャンパスなどの行事開催日は開

館した。

今回の展示テーマの決定、準備作業、展示の構成と内容、そのほか展示に関する事項などについて、以下に記す。



企画展チラシ

一 展示の方針と準備

関西大学では、平成三年に天津事件判決一〇〇周年記念行事（法学研究所主催）の一環として、「児島惟謙と関西大学展」（五月十一日～二十七日）を図書館で開催している。前回の展示は大津事件に重点を置いているので、今回の展示では、それとの重複を避け、関西大学と児島惟謙との関わりを中心とすることとし、あわせて、従来あまり知られていない父親としての児島惟謙にも焦点をあてた。

関西大学と児島惟謙

関西大学が、復興か消滅かの岐路にさしかかっていた終戦直後、第十七代学長となった岩崎卯一（一八九一—一九六〇）は、「関大祖宗」のシンボルとして、関大創立者群像の一人、児島惟謙に注目した。『関西大学学報』関大ルネッサンス特輯号（第二二六号）に、「関大の始祖、児島惟謙先生を憶ふ——正義を権力より衛れ——」と題する巻頭文を載せ、その末尾で、「われら関西大学の後

進は、母校の始祖児島惟謙先生より何を学びとらんとするか。それは関大風風の根幹たる『正義の権力よりの守護』である（後略）」と述べている。



岩崎卯一の巻頭文



『関西大学学報』226号



第1回惟謙祭写真



第11回惟謙祭プログラム

しかし、当時この児島惟謙論は、理事者側からも同僚教授からも冷やかな眼で見られたという。ところが、その後、学生たちのあいだで「惟謙ブーム」がおこる。昭和二十八年十一月に開かれた大学祭における雄弁会と新聞会共催の第一回惟謙祭では、「正義を権力より護れ」をテーマに掲げ、岩崎卯一が「関西大学と惟謙」と題して講演し、児島惟謙の長女西園寺寿代子、二女辰馬愛子、三男児島俊之助が招かれて、父親児島惟謙について語つ

ている（『関西大学新聞』復刊第八八・八九合併号）。雄弁会主催の惟謙祭は、昭和四十三年（第十一回）まで続く。岩崎学長が提唱した学風は、学生運動などの影響で大学祭が中断するまで、雄弁会を中心とする学生のあいだで尊ばれ、受け継がれてきたといえる。展示に関しては、テーマとして「正義を権力より護れ」こそ、もつとも相応しく、これ以外にないと判断すると、準備作業も著しく進捗した。

遺族の協力

辰馬和代氏（二女愛子の嫁ぎ先、辰馬家）からは、二女愛子の結婚に際して父児島惟謙が渡した懐剣と自筆書簡を拝借した。あわせて、児島惟謙・重子夫妻、辰馬利一・愛子夫妻の写真も。後日、仏壇の引き出しから見つかったと連絡を受けた、辰馬喜十郎と惟謙が並んで正座した写真も提供していただいた。なお、この写真は、田畑忍著『児



児島惟謙と辰馬喜十郎



児島家の肖像

島惟謙』(昭和三十八年、吉川弘文館)の口絵に児島惟謙の部分のみ掲載されている。

また児島鐵也氏(児島惟謙令孫、三男俊之助長男)からは、おそらく長男正一郎が北京の日本公使館に赴任する直前に一族全員で撮ったと思われる写真や第一回惟謙祭などの写真の提供を受けるとともに、貴重なエピソードを拝聴できた。

さらに緒方眞澄氏(児島惟謙父緒方惟彬の実家)からは、児島が惟蔵と名乗っていたときの緒方惟貞宛書簡と将来衆議院議員に立候補する際の協力を求めた緒方陸朗宛書

簡を拝借した。

(財)宇和島伊達文化保存会、宇和島市役所、大津市歴史博物館、白鹿記念酒造博物館、長崎歴史文化博物館などの公的機関からも年表に掲載する写真や展示に関する情報の提供にあずかった。こうして、未公開資料を含む三十五点を揃えることができた。

二 展示の内容

まず、「ごあいさつ」で本企画展の意義にふれ、年表(児島惟謙とその時代)では、児島が幕末維新の激動期から近代国家建設の時代を生きた人物であることを示した。展示ケースには、懐剣、書簡類を展示し、壁面に第一回惟謙祭を報じる新聞記事パネル、大津事件大審院判決書(写し)、校友北條秀司作「司法権」のポスターなどを掲げた。

展示室中央の写真パネル展示スペースには、「司法官児島惟謙」、「護法の神児島惟謙」、「児島惟謙と関西法律学校」、「児島惟謙と関西大学」の四つのテーマで、合わせて十八枚の写真パネルを揃えた。

つぎに展示目録を引用して、内容の紹介としたい。

展示ケース（口絵参照）

①写真 児島惟謙の肖像

「この世へ叱りに生れてきたみたいだ」（『関西大学新聞』昭和二十八年十一月十五・十八日合併号）とわが子にいわれたようであるが、穏やかなまなざしをしている。

辰馬和代氏提供

②写真 児島惟謙の妻、重子の肖像

辰馬和代氏提供

③写真 児島家の肖像

前列左から二女辰馬愛子、妻児島重子、長女西園寺寿代子、長男正一郎母・村越由子、孫西園寺実。後列左から、辰馬利一、二男児島富雄、西園寺亀次郎、三男児島俊之助、長男児島正一郎。 児島鐵也氏提供

④二女愛子宛児島惟謙書簡

明治二十八年四月、二女愛子が辰馬利一と結婚するに際して、夫の両親には孝を、夫には貞を尽し、使用人には恩威をもって愛しむよう諭している。実家の東京と嫁ぎ先の西宮は、汽車に乗れば、十八時間で逢うこ

ともできるので、長い間逢わないのは、めでたいことと知るべきだと述べ、追伸で、「お愛さん、おてん婆をするなよ」と語りかけている。嫁ぐ娘への父親児島惟謙の恩愛の情が偲ばれる。

辰馬和代氏所蔵

⑤懐剣

明治二十八年四月、二女愛子が嫁ぐとき、「爾後は何事によらず相談ごとがあれば、是（懐剣）にしなさい」といって、父児島惟謙が手渡した懐剣。

辰馬和代氏所蔵

⑥関西法律学校の講師、校主、幹事に宛てた児島惟謙の書簡（明治二十一年）

関西法律学校名誉校員である児島惟謙が、本校の会計年報等を調査した結果、講師がその会計事務等の雑務に関与した疑いがあったため、講師、校主、幹事に対し、それぞれの責任を明確にし、その本分を全うして、本校の基礎を固め、将来に盛大を期すよう諭した書簡（複製）

関西大学年史編纂室所蔵

⑦緒方陸朗宛児島惟謙書簡（明治二十七年四月十日）

児島は、緒方陸朗に、「政府が議会に対して非立憲的

であるため、その弊害を一掃して、人民の権利を維持

しようとするれば、衆議院を強固にしなければならぬ。

その機会に遭遇すれば、宇和郡選出の衆議院議員にな

りたいが、被選挙資格をもっていないので、足下（緒

方）所有の田畑の中から地租十五円以上を三年間、老

生（児島）の名義で納税することをお願いしたい」と

述べている。

⑧写真 緒方陸朗（緒方家十六代惟忠 一八六〇—一九三

五） 緒方眞澄氏提供

⑨緒方惟貞宛児島惟蔵書簡（年不詳）八月二十五日

児島は久しぶりに宇和島へ帰省したが、緒方家へ挨拶

に行くことがかなわず、代わりに土産物を送ったので、

受取って欲しい旨を述べている。明治初年、児島は惟

蔵という通称も使っていた。 緒方眞澄氏所蔵

⑩写真 緒方惟貞（緒方家十五代 一八二二—一八三

惟貞は、明治三年三月、野村騒動が起こり、領内各地

の農民一万数千人が野村庄屋に押しかけたとき、農民

に食糧などを提供する一方、農民代表を集め、藩庁と

の間に立ち、騒動を解決した。 緒方眞澄氏提供

中央写真パネル

A 司法官 児島惟謙



①児島惟謙三十七歳の肖像（明治六年十二月撮影）

この頃、児島惟謙は大坂から東京へもどり、司法省裁

判所民事課詰であった。

②壮年時代の児島惟謙

③大阪控訴院長時代の撮影と伝えられている写真

明治十九年五月から明治二十四年四月まで、児島惟謙

は大阪控訴院長を務めていた。この間、関西法律学校

の創立に寄与し、名誉校員として監督的役割を果たした。

④大審院長時代の写真

B 護法の神 児島惟謙



①大礼服を着た児島惟謙

②児島惟謙六十五歳の肖像（明治三十四年五月十一日、滋

賀県大津で撮影）

③児島惟謙と辰馬喜十郎（明治三十四年、西宮の辰馬家で

撮影）

二女愛子の夫である辰馬利一の父、喜十郎と並んで正座する児島惟謙。二人はとても仲がよかった。

辰馬和代氏提供

④宇和島城跡堀め手門前に建つ児島惟謙像

⑤出生地に建つ記念碑

C 児島惟謙と関西法律学校



①『関西法律学校規則』（明治十九年十月）

D 児島惟謙と関西大学

「関西法律学校設立ノ主旨」、「関西法律学校規則」、「関西法律学校々員規則」から成る。その末尾に名誉校員として「大阪控訴院長 正五位 児島惟謙君」と記されている。

山野博史法学部教授寄贈

② 関西法律学校第一回卒業式を報じた記事（『大阪日報』明治二十二年九月十八日）と卒業式後の懇親会を開催した自由亭（『大阪市中近傍案内』より）

③ 関西法律学校の校長、講師、三年生の集合写真

明治二十四年四月二日撮影。興正寺には「関西法律学校」の校名が大きく掲げられていた。

④ 発祥の地に建つ記念碑（大阪市西区京町堀）

昭和四十九年三月、関西法律学校が開設された願宗寺跡地に大阪市の顕彰史跡として建立。この写真は同年五月、久井忠雄理事長、明石三郎学長、横田健一文学部教授、神屋敷民蔵校友会事務局長、願宗寺縁故者らが、この記念碑を囲んで撮影したもの。



① 雄弁会と新聞会が中心となって開いた第一回惟謙祭（昭和二十八年十一月七・八日）
児島鐵也氏提供

② 第十一回惟謙祭（昭和四十三年六月十四・十五日）プログラム

③ 「正義を権力より衛れ」として、児島惟謙に光をあてた岩崎卯一学長の巻頭文（『関西大学学報』関大ルネッサンス特輯号、第二二六号、昭和二十二年十二月十五日）

④ 図書館（当時。現簡文館）前に設置された胸像の除幕

式（昭和四十年十一月二日）

今村久兵衛、輝久父子の作。 校友谷口隆佳氏寄贈

⑤ 児島惟謙館に設置された胸像の除幕式（平成十九年七月二日）

裁判所構成法施行五十周年記念として大審院に設置された胸像の縮小像。 児島鐵也氏寄贈

壁面写真パネル

① 緒方家

児島惟謙の父、惟彬の実家である緒方家は代々、宇和島藩 東宇和郡野村庄屋や野村組代官を務め、酒造業を営む。 児島惟謙は、嘉永五年、十六歳のときから三年間、同家十五代惟貞の下で酒造業を手伝いながら文武の修業に励んだ。 明治十七年秋写す。

緒方眞澄氏提供

② 写真 現在の緒方家

③ 写真 緒方酒造（創業 宝暦三年）

④ 死を覚悟で大津へ

昭和二十八年十一月七・八日、第一回惟謙祭が、関西

大学創立六十七周年記念大学祭と併行して開かれた。

このとき、児島惟謙の二女、辰馬愛子氏は、大津事件の際の父の思い出をこう語っている。「父は短刀を懐にして、『お父さんはもう帰ってこないかもわからんぞ。お母さんのいうことをきいて孝行せよ。決して不正なことをしてはいかん』と戒められたことを今でも忘れておりません」（『関西大学新聞』復刊八八・八九合併号、昭和二十八年十一月十五・十八日）。



第1回惟謙祭を報じる新聞記事

⑤ 大津事件大審院判決書（写）

大津事件では、ロシア皇太子ニコライを切りつけた巡査津田三蔵に「皇室ニ対スル罪」を類推適用して極刑に処しようとした政府と、「普通人ニ対スル罪」を適用すべきであると主張した大審院長児島惟謙が対立した。結局、大審院は、「普通人ニ対スル罪」（謀殺未遂ノ犯罪）を適用して、無期徒刑とした。この判決は、司法権の独立を護つたものとして有名である。

児島が勅語（今般露国皇太子ニ関スル事件ハ国家ノ大事ナリ、注意シテ速ニ処分セヨ）をもとにして裁判官達に圧力を加えたことが問題であるとの指摘がなされるが、児島としては、勅語をもとに司法部を統一することによって、法治主義を遵守し、国家の威信を回復しようとしたのである（最高裁判所から関西大学法学研究所への寄贈品）

⑥ 「司法権」——北條秀司作二幕

この戯曲「司法権」は、児島惟謙が「大津事件」の際にはたした業績を、卒業生の文化功労者北條秀司が描いたもの。昭和二十九年十月、東京明治座で初演。関

西大学創立八十周年記念上演。

なお、会期中に一部展示を替えた。辰馬家所蔵の懐剣と書簡は、八月六日まで展示し、秋学期には複製書簡を展示した。緒方家所蔵書簡は、サマーキャンパスが開催された八月二十三日から翌年一月二十三日まで展示した。

三 児島惟謙の郷土宇和島

企画展開催が機縁となって、宇和島市・宇和島市教育委員会主催の児島惟謙没後百年記念行事に参加した。七月五日午前十時から、宇和津彦神社の児島惟謙鎮魂碑前で神事が営まれ、続けて「これかた太鼓」が披露された。午後二時から、場所を宇和島市庁舎二階大ホールに移し、児島惟謙没後百年記念講演会が開催された。石橋寛久市長、明神崇彦教育長、児島鐵也氏の挨拶のあと、熊博毅関西大学学術センター次長は、児島惟謙と関西大学との縁について紹介した。

近藤俊文 宇和島歴史文化研究会会長、緒方眞澄 西南四国歴史文化研究会会長の児島惟謙に関する講演を、小学生的のグループが最前列で熱心に聞き入っていたのが印

象深い。

当日、地元の萩山正治医師から、衆議院議員時代の児島が地租増徴反対運動に関わっていたことを示す児島の自筆書簡を拝見した（「児島惟謙と地租増徴反対運動」『愛媛県医師会会報』第八三七号、平成二十年）。また、池本覺氏によって、児島惟謙の母宛書簡の研究が刊行されていることを知った（『もう一人の児島惟謙 母那保子に宛てた書簡より』平成十七年、南風印刷）。



これかた太鼓

平成二十一年一月二十五日、池本氏の好意により、三間町の正法寺に児島が建てた母那保子の墓、母の実家太宰家の墓地に建つ児島惟謙の墓、黒井地の庄屋太宰遊淵が私財を投じて築いた中山池を廻り、氏が考証された母那保子の住居跡にも案内していただいた（惟謙が生れるとまもなく離縁したため、二人は別れて暮らさざるをえなかった）。

四 企画展を開催して

平成十八年十月十五日の開館以来、年史資料展示室への入館者数は、平成十八年度、一四五三人、平成十九年度、七三八三人、平成二十年度、六五七一人（二月二十八日現在）、総計一万五四〇七人である。

日頃は、展示室の隣にある事務室で仕事をしているため、展示品の説明は不十分とならざるをえないが、校友会のスプリングフェスティバル、教育後援会総会、オープンキャンパスなどの行事開催日は、終日展示会場に常駐して、展示品の解説に努めた。

オープンキャンパスの日、母親といっしょに訪れたあ

る高校生は、関西法律学校第一回卒業生のなかに同郷の人を見つけて、ぜひ本学の史学科に進んで勉強したいと言って目を輝かせていた。また、教育後援会総会の日は多数の来館者で狭い部屋はいっぱいになるが、宇和島から訪れたある女性は、誇りに思っている児島惟謙が関西大学と結びつきがあることを知ってとても感激しました、と語っていた。

新学期が始まると新入生への導入授業で訪れる学生も多く、今後とも年史資料展示室の積極的活用が望まれる。

当室では、これまで児島惟謙関係の資料としては、児島惟富氏（児島惟謙曾孫、二男富雄孫）から寄贈を受けた写真資料を保存しているが、今回の企画展開催によって、この資料群を大いに充実することができた。資料収集にいつそう励むとともに、その活用方法などについてもさらなる創意工夫の必要があると思われる。

（ふじわら ありかず 出版課 年史編纂室）